

日米の環境文学を研究領域としていて思うのは、両者が、庶民の文化への関心の有無という点で大きく異なるということである。総じて、アメリカの環境文学（とくに、一人称ノンフィクションであるネイチャーライティング）には、「私」が自然環境と向き合い、自然という他者あるいは自然という異文化との交渉を重ねながら、環境意識を深めエコロジカル・アイデンティティを獲得するという構図がある。一方、日本の場合、エコロジカル・アイデンティティの形成に庶民の文化が作用していることが少なくない。網羅的に調べているわけではないが、庶民の文化に着目することによって、日本の環境文学の特徴のいくつかが明らかになると同時に、比較研究にもとづく環境言説の深化が期待できるのではないかと思う。本報告では、日本の代表的環境文学とみなされる森崎和江と石牟礼道子の作品を検討し、庶民の文化と環境文学・思想の関係に迫りたい。

## 庶民のコスモス

本報告では、庶民の文化を、日本の近代化に絡めとられなかった人々の生のいとなみやそれを支える価値観という意味で用いる。それは具体的には、森崎が炭坑や海辺に見出す「地上の権威とは無縁な生き方」（森崎『北上幻想』43）や、石牟礼の作品で主要な位置を占める、「見かけの上では無学」だが、「天地の<sup>ことわり</sup>理」と人間生活における倫理の何たるかを、陽と月と潮と土に訊ねて己の五感で読み解き、書物から知るのではなく日常の暮らしからそれを体得してきた」人々の世界観を指す（石牟礼「乳の潮」342）。場所との親密な関係において築かれるエコロジカル・アイデンティティ、そこに森崎や石牟礼は近代的自己を超える可能性を読み取っている。ただし、エコロジカル・アイデンティティを育む庶民の文化は、水俣のかつての親密圏がいまやコンクリートで埋め立てられてしまったように、近代化の波のなかで封印されてしまったか、あるいは森崎が訪ねる採鉱現場や海辺の集落のように、かろうじて辺境に洗い残されているというのが現状である。<sup>1</sup>

ここで確認しておかねばならないのは、森崎や石牟礼が描出する庶民の世界というものが、いわゆる前近代的なものではないということである。石牟礼が描く庶民の共同性が「前近代的共同体のもたれあいの共同性ではなく、自立を前提としてい」と指摘されるように（岩岡 179）、森崎と石牟礼はともに、近代的自我とは異なる、共同性を育む個の自立、あるいは自立した個の共生というものを、庶民の生のいとなみに読み取っている。近代に絡めとられない辺境の知は、前近代ではなく、非近代なるものとして理解されねばならない。

では、異なる個の共生とはどのようなものか。石牟礼や森崎が描く庶民の世界では、村人が都会人をからかったり、炭坑婦が他の坑夫を茶化したりするような、からかいの文化が散見されるが、そこに非近代的な知の一端をみることができるのではないだろうか。「海辺の村では都会人をからかう風があって、そのことで他者の異なる世界と自分の世界との敷居が段々なくなっていく」と石牟礼が語るように（榎田 184）、差異の受容

---

<sup>1</sup>森崎と石牟礼が庶民の文化に代替知を探究する背景には、両者ともに谷川雁が主宰する『サークル村』を文学的出発点とし、思想的基軸として庶民の声に耳を傾けるというスタンスを重視していたという事実がある。

を促すからかいの論理は、異なる価値観が共存する親密圏の形成を根底で支えているように思われる。

庶民の文化へのアプローチの仕方にも留意しておきたい。石牟礼も森崎も、庶民を外から観察するのではなく、庶民の世界をその内部から語ることを目指している。ただし、両者のアプローチは対照的だ。土地の者<sup>ネイティブ</sup>として水俣庶民の世界を熟知している石牟礼は、庶民の経験世界を「この国の文学史上初めて明らかにした」書き手として評価されており、石牟礼文学によって、それまで外部から観察可能な「ワールド」として描かれていた庶民の世界が、具体的に生きられた「コスモス」へと根本的変貌を遂げたといわれる（渡辺 181）。無論、それが可能になったのは、石牟礼が庶民世界の内部に埋没するのではなく、庶民を「無学の人々」とみなす近代知の暴力や、失われた庶民の文化を郷愁的にとらえるイデオロギーに意識的であったからにほかならない。石牟礼にはフィクションが多いが、それは、現代の諸制度から解放された位相においてのみ、庶民の世界をその内部から描くことができるからだろう。

（場所の書き手）である石牟礼とは対照的に、日本軍占領下の朝鮮で生まれ育ち、18歳で九州に移り住んだ森崎には、故郷とよべるものがない。それはしかし、見方を変えれば、同一の論理に支配されない自由な立場にあるということでもある。「私は、いわゆるホームをこしらえないことを信条にして、ここでふるさとさがしにとりかかろう」（「暗黒という光に向かって」61）と語る森崎は、ホームという概念の感傷性を十分に自覚している。既成の論理に回収されない真に新しい言説の可能性を庶民の文化に見出す森崎に、聞き書きという表現形態が多いのは、それが、辺境の物神化を回避するかたちで庶民の文化を記述する唯一の方法であるからだと考えられる。これは言うまでもなく、失われたホームをフィクションの世界で蘇らせる石牟礼の手法とは対照的である。

## 主婦というポジション

庶民の文化を炙り出す方法は異なるが、森崎と石牟礼は〈主婦〉の目線を内在させているという点で共通している。一般に主婦とは、家事や育児など生命の生産・維持・再生産活動を担うことが自明視されている女性を指すが、とくに1970年代のウーマンリブ運動以降、その社会的地位は低い。主婦ほど生命にかかわる活動を全面的に担っている者はいない一方で、社会的に軽視されているのは、生命をめぐる日常的活動に価値をおかない資本主義社会のシステム自体に原因があるからにほかならない。これを逆にとらえれば、主婦の目線にたつことによって、資本主義システムからこぼれ落ちた生命重視の価値体系に接近することが可能になると考えられる。

石牟礼の場合、主婦の目線は、日々の食事や季節の食べ物を描くナラティブに埋め込まれており、表面化しない。石牟礼の作品には家事や行事の描写が際立って多いが、それは、家事や行事が庶民の世界に占めた大きさそのものをおのずと語っているという意味において、庶民世界を読み手にバーチャルに体験させるはたらきを持つと言える。一方、森崎は、主婦を家庭という制度から解放し、想像的＝創造的な思索のポジションへと再構築する。「書斎らしいものに落ち着けない私は、これらの文章を、調理台兼用の大きな食卓の上で書いた。その食卓はしばしば労働者たちとの共食や討論の場に使われたから、卓上にひろげられた原稿は幾度も片付けられて家の中を持ち運ばれた」（『ははのくにとの幻想婚』あとがき）と語られるように、概念世界と日常世界

が乖離していない新たな言説を産み出す準拠枠として主婦を再生させるのである。森崎の試みは、この作家の思想的バックボーンを形成した父親のフェミニスト的信条を表面的には裏切っているように見えるが、「あまりにも自然すぎて、自己対象化の場にまだもちだされてい」ない「いのち」の問題を思想化するために選び取られた戦略なのだ（『いのち、響きあう』32）。

主婦というポジションを逆手に取ることによって、石牟礼は庶民の経験世界の描写を、森崎は日常の生の思想化を試みる。いずれの場合も、主婦の目線にとらえられるのは、経験と概念が乖離していない世界にはほかならない。石牟礼はそれを失われた過去から招喚し、森崎は辺境の生にたずねながら新たに産み直そうとするのである。

### 「私」の再構築

最後に、親密性を育む個をより具体的に考える糸口として、石牟礼と森崎の作品における「私」のあり方に目を向けたい。

石牟礼の作品を読んでいると時折、語り手が誰であるのかわからなくなることがある。『苦海浄土』の「ゆき女きき書」が良い例だ。書き手である石牟礼と、水俣病に罹患した漁婦のことばが、截然としない世界が展開する。何故か。考えられる理由のひとつとして、石牟礼が描く庶民のコスモスに自己完結的な「私」が存在しないということがある。私という存在は共同体の関係性の結節点のようなものであり、だから、芋蔓を引っぱるように、私のことばは共同体のことばを連れ立って発せられるのである。そのようなポリフォニックなことばによって、読み手は、共同体＝内＝個という存在の世界へと導かれる。

森崎は逆に、徹底して一人称にこだわりながら個の共生を模索する。方言と標準語の裂け目に、性と産が紡ぐ生命の風景に、この書き手は従来の私という一人称の不確定性を感知せずにはいられない。そんな森崎が拠り所とするのは生命科学である。生命科学の書籍を「私の新古典」と位置づけ、『古事記』が日本の古典なら、これは私の古典だよ、と思いました。なぜなら、私の心身一如の存在が、はるか原初のおやとともに生きつづけてきた世界が、なんのかがりもなく物質として展示されていたのですから」と語る（『いのち、響きあう』71）。「地球」ということばは、経験と乖離した概念的な語であるという意味で、おそらく石牟礼の作品には絶対に出てこないが、森崎の作品には頻出する。世界を「なんのかがりもなく物質として展示」する生命科学の文脈において、また、「地球」という概念語がいまや幼児の日常語となっている現実と向き合わねばならないという認識とともに、「地上の権威とは無縁な」庶民の文化と生命科学が、すなわち非近代がポスト近代と交差する地点で、森崎の「私」さがしは続く。

同じ年に生まれ、ともに九州に生活の拠点をおき、日本の環境文学を牽引している石牟礼と森崎は、土地の者ネイティブとよそ者ノンネイティブというスタンスの点で決定的に異なる。そういう対照的な二人の書き手が、奇しくも庶民の文化という共通の位相に代替的自己の可能性を見出しているという事実が示すのは、場所に根を下ろした者にもそうでない者にも開かれた親密圏のあり方が庶民の文化に見出せるということにはほかならない。これは、日本の場合にもみ当てはまることなのだろうか。それとも、グローバル化する環境文学研究に向けた日本からの提言となりうるのであろうか。少なくとも、庶民の文化への着目を強化することによって、ネイティブとノン・ネイ

ティヴという知の二項対立を回避しつつ他者受容を促すような環境言説の深化が期待できることはたしかだろう。

#### 引用文献

石牟礼道子『苦海浄土—わが水俣病』1972. 講談社, 1993.

--- 「乳の潮」色川大吉編『水俣の啓示・下』筑摩書房, 1983. 335-79.

岩岡中正編『ロマン主義から石牟礼道子へ—近代批判と共同性の回復』木鐸社, 2007.

榎田弘『「地域公共圏」の政治学』をめぐって『道標』8(2005): 178-85.

森崎和江『ははのくにとの幻想婚』現代思潮社, 1970.

--- 「暗黒という光に向かって——『近代民衆の記録・鉦夫』が問いかけるもの」1972.『解放の思想 その原点から教育を』全国解放教育研究会編, 1974. 56-67.

--- 『いのち、響きあう』藤原書店, 1998.

渡辺京二「石牟礼道子の時空」『不知火—石牟礼道子のコスモロジー』藤原書店, 2004. 174-200.